

終わりの夜伽

凰太郎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「ねえ？ おかあさん？ 一番強い動物って何？」

寝つけぬ子供の純粹な好奇心に、母親は真摯に答え続ける。

ありつたけの愛情をもってして……。

優しくも切ないSF掌編。

目次

終わりの夜伽

「ねえ？ おかあさん？」

つぶらな瞳が、添い寝する母親を正視して尋ねた。

母親は我が子が安らかな眠りに就けるように、ポン……ポン……と緩やかなリズムに体を叩いてあげていたが、どうやら子供特有の強い好奇心というものは睡魔の誘惑すら跳ね退ける強力な結界らしい。

だから、柔和な微笑みで聞いてあげる事とする。

「なあに？ ぼうや？」

「いちばん強い動物って、なあに？」

他愛のない質問である。

実に子供らしい疑問である。

脈絡もない発想であり、実用性も伴わない。

知ったところで、どうという事はない。

知らずとも、人生に支障はない。

それでも、実に子供らしい。

無垢で汚れのない吸収欲。

だから、母親は答えてあげる事とする。

「そうね。ライオンかしら？」

「ライオンさんなの？」

「ええ、そうよ？ ライオンは『百獣の王』って呼ばれているぐらいだもの」

「ライオンさん、おうさま？」

「ええ」

ポン……ポン……。

「んんん」

我が子は些か納得のいかない表情に曇った。

「どうしたの？」

「ゾウさんは？」

「え？」

「ゾウさんは大きいよ？ ライオンさんよりも大きいよ？」

ああ、そうか。
思い出した。

この子の御気に入りは「ゾウさん」だった。
動物園へと連れて行けば真っ先に駆け目指し、檻の前では飽きずに
見入っていたものだ。

その嬉々とした笑顔が思い出すに可愛く愛おしい……。
だから、母親は答えてあげる事とする。

「そうね。ゾウさんは、とても大きいから、きっとライオンさんも敵わ
ないわね」

「ゾウさん、大きいから強い?」

「ええ」

「ライオンさんよりも?」

「ええ」

ポン……ポン………。

「大きいのが、強い?」

好奇心は鎮まらない。

むしろ以前より活性化した。

が、それならそれでもいい。

母親は付き合う考えに落ち着いていた。

「だいたい大きいものは強いなの?　ゾウさんも、ゴリラさんも、クジ
ラさんも……」

「ねえ?　おかあさん?」

「なあに?　ぼうや?」

「いちばん大きい動物って、なあに?」

「そうねえ……クジラさんかしらね?」

「クジラさんなの?」

「ええ」

ポン……ポン………。

「ボク、もっと大きいのが知ってるよ?」

子供特有の博識披露が目覚めました。

吸収した知識は吐き出したくなるものだ。

ましてや、このぐらいの幼年期ならば……。だから、母親は聞いてあげる事とする。

「あら？ 何かしら？」

「アラビアンナイトの鳥！」

「ロック鳥？」

「うん！」

実に子供らしい荒唐無稽な連想であった。

空想産物と現実が並列的に扱われている。

とりわけ〈怪物〉という存在は、無限の自由発想に一際眩い輝きを彩る宝石であった。

そして、その奔放さは幼少だから許される特権だ。

大人になるに連れて、そうした発想は幼稚と社会風潮から抑制される事となる。

だから、母親は広げてあげる事とする。

「もっと大きいのもいるのよ？」

「ロッチョーよりも大きいの？」

「ええ。それはギリシアの〈テュポン〉と呼ばれる怪物。いっぱい蛇の頭があつてね、山よりも大きいの」

「怖い」

子供らしい素直な恐々が可愛らしく、母親はクスリと苦笑した。

「そうね。とても怖いわね」

ポン……ポン………。

「その怪物、強いのか？」

「ええ。神様が逃げ出しちゃうぐらい」

「すごいー！」

今度は一転に純粹な驚嘆。

本当に子供の一喜一憂というものは色を変える。

見ているも飽きないし、また愛くるしい。

だから、母親は続けてあげる事とする。

「もっと大きいのは北欧神話の〈フェンリル〉かしら？」

「フェーリル？」

「とつても大きな狼でね、口を開くと空と地面まで届くのよ？」

「大きい！」

「そうね」

母親もまた、子供の頃から空想物語が大好きであった。

若い頃は、それこそそれだけの神話本を買い漁って読み耽った事か。

やめたのは、いつだったか……。

幼稚な趣味と周囲から蔑笑されたので封じた。

大人になるなら子供騙しから醒めて、それらしい実用的な趣味にしなさい……と。

それが、こうして役立つ日を迎ようとは……。

微笑ましく嬉しい遺伝であった。

「強いのか？」

「ええ、神様と相討ちになるぐらい」

ポン……ポン……。

「それが一番？」

「もつと大きいのは、アフリカのへダ〜という蛇」

「どのぐらい？」

「地球を何周も巻くぐらい」

「ええ？ すごーい！」

ポン……ポン……。

ポン……ポン……。

ポン……ポン……。

語る愛情に包まれ、いつしか子供は寝入っていた。

興奮が精神的な疲労を心地よく誘発したようだ。

スヤスヤとした寝息が愛しい。

だから、母親はそつと額にキスをする。

ありったけの愛を込めて……。

「おやすみなさい、私のぼうや……」

そして、静かに屋外へと出た。

母親は知っていた。

この世でへ一番強いものゝを……。

それは如何なる動物よりも強く、如何なる怪物よりも恐ろしい。

眼前の光景は、その立証に他ならない。

荒廃と汚れた土壌は地平と広がり、瓦解にくすんだビル群が文明の墓標と呪詛を唱う。

人間——。

その恐ろしくも愚かしい者の名は、人間——。

あらゆる生態系を滅ぼし、命の源泉たる自然を食い潰し、そしてまた一夜にして自らの存在すら歴史から抹消してしまふ強者。

黒塵を孕んだ風が吹き抜ける。

死の灰を踊らせる洗礼が風ぎ去る。

それに吞まれるかのように、防空壕に残留した二対の思念は陽炎と搔き消えた。

さりとも、風は知っていた。

この世で一番強いもの——それは死して尚、我が子を慈しんで止まない「母親の愛情」だという事を。

〔終〕